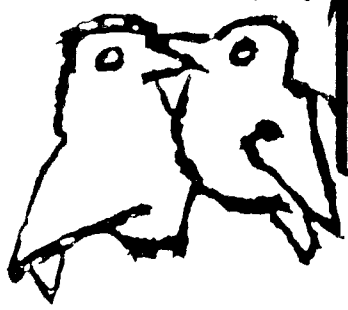


武安
全集

学院图书馆
藏书章



第十七卷

武者小路實篤全集 第十七卷

一九九〇年六月二〇日 初版第一刷発行

著者——武者小路實篤

発行者——相賀徹夫

発行所——小学館

二〇一〇一 東京都千代田区一ツ橋二丁目二番一号

振替 東京八二〇〇番

電話 編集 〇三三三〇—五二三四

業務 〇三三三〇—五三三三

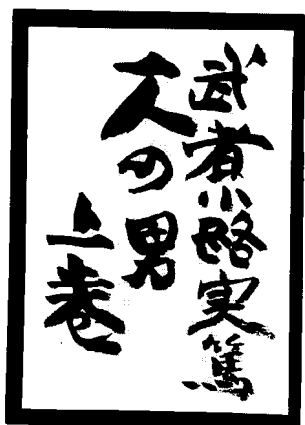
販売 〇三三三〇—五七三九

印刷・製本——大日本印刷株式会社

用紙——三菱製紙株式会社

※著者検印は省略いたしました。 ※造本には十分注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。 ※本書の内容各の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

一人の男



〔『一人の男』上巻の函。題字：梅原龍三郎。下巻も同じ〕

一人の男

一

僕が「改造」に「或る男」をつづけて書いたのは三十一、二の時に、書き上げたのが三十八位と思う。もう四十年以上の昔の事である。当時も僕は書く勇氣があまりなかったが、熱心にすすめられたので、ついいい気になって書いた。書かでもいい事も書いたような気がするが、読みなおさないからあまり気にならない。その後も左のまゝで何遍か書きかけた事があるが、もう一息のり気になれず、中断のままになったが、別に惜しい気もしていない。ところが今年になって「新潮」からは非書くようにすすめられたが、身体の調子がよくなかった時で、書くとは生命に関係すると言つて断わつていたので、つい書いてもいような気になつて来た。

その時、雑誌か新聞に、自伝を書く人は書き上げない内に死ぬ人が多いと、二、三の例を上げて書いているのを読んだ。それを読むと僕の例の癖が出て、それなら一つ書いてやろうかという気になつた。

死にたいから書くのではない。死ぬのが怖くつて書かないと思わ

れるのが頼にさわるのだ。「或る男」は僕が「新しき村」を始めた処で終つていと思う。読みなおせばすぐわかるが、僕はこの小説(?)は「或る男」の続篇として書くつもりはないので、自由に書くつもりで読みなおす必要は認めない。僕も四十年以上たった、昔の僕だとは思わない。たしかに今の僕は八十一歳の老人である。昔のように活気はない。だがそれだけ賢くはなつてゐるつもりだ。卒業するものは卒業して来たつもりだ。

だが僕はこの自伝的小説、小説と言つていいかどうかかわからない、しかし自伝を忠実に書くつもりもない。筆の向くままに、自分が経験して来た事を、なるべく事実に忠実に書きたいと思つてゐる。但し僕はここで告白をしようとは思わない。僕は何処までも人間である。自分が人間として恥ずかしく思うようにつくられてゐる事実に僕は忠実になる。僕は自分の秘密にはふれたくない。他人の秘密にはなおさらである。

僕は既成宗教の信者ではなく、何処までも一個の人間である事に自信を持つてゐる。懺悔、告白なぞという事にあまり関心はない。同時に僕は自分以上に他人に買いかぶつてもらいたくもない。だが自分を卑下したくもない。僕は最も日本人らしい一個の人間であり得れば満足する。僕が愛敬する人々は勿論日本人許りではない。僕が限りなく愛する芸術家は世界の何処にもゐる。何千年前にもゐる。僕は人間だ。純粹の人間を愛する。僕が愛する事が出来ない人は、他人を不幸にして平気な人だ。やむを得ず、自分の意志でなく、自分の心ではとがめられながら弱いために他人の不幸の原因になる場合もあるが、しなくつてもいいのに、わざと他人を不幸にして、ずるそうな、賤しい笑いを浮べる人は病的人間とは思ふが、好きにはなれない。勿論その人も氣の毒な人とは思ふが、犠牲になつた人は

なお気の毒で、そういう目に他人をあわせて平気な人間は憎悪しないわけにはゆかない。日本人にそういう人がある。情けなく思い恥ずかしく思っている。不幸になった人は気の毒以上だ。

しかし僕は自分に出来ない事に責任を持つ気はしない。自分に力もない癖に、不徳のいたす処などと自分に責任があるような顔をする人を見ると、自惚れるなど言いたくなる。しかし責任の地位にいる人が本当にそう思うなら一方気の毒な氣もする。

つい余計な事を書いた。本文に入る事にする。

二

「或る男」の妻は房子である。

だがここに出てくる主人公の妻は安子である。僕は妻以外の女を知らないとは言わないが、妻は二人だけである。そして最初の妻とは二十七歳の時に結婚し、僕の三十六、七の時に別れ、今の妻安子と夫婦になった。

僕は今になって、最初に房子と結婚した運命を喜んでゐる。そして三十六位で今の妻を知り、今の妻と結婚した運命を僕は感謝してゐる。

房子と結婚した時は僕の二十七位の時だと思ふが、その時、十五歳僕より若い安子は十二歳だった。房子と僕の間には子供がなかった。もし子供が次々と生れたら、僕は新しき村の仕事をしたかどうか。僕は僕の一生にとって最も大きな仕事である、新しき村の仕事をしたために知った多くの実に愛すべき人々を知らなかったら、僕の一生は今とまるで変っていたと思うし、僕の人生観も変っていたかも知れない。だから子供が出来る出来ないにかかわらず、僕は新

しき村をつくらなかった自分を考える事は出来ない。しかし僕の理想は、僕と房子の間に子供が生れていたら、僕はその生活に追われて他の事を考える暇がなかったのが事実ではないかと思う。人の運命というものは、実に僅かなちがいで、まるでちがう道を歩くのが事実と思う。だから僕は今日の僕で満足し、あの時、こうだったらこうなつたらうといういろいろの想像をするのは馬鹿げていると思う。そういう想像をすれば切りがない。しかし事実は事実である。例えば僕の父が三十七（今風に言えば三十六）で死なずにもっと長生きしていたら僕の運命はすっかり変つていたらう。だがどう變つていたか、その時はその時でよかったかも知れないが、どんな自分が出来上つていたか。だからといって父が死んでよかったとは言えない。こういう事を言いだしたら切りはない。今日の僕は過去のいろいろの事実があつて出来上り、僕の愛する娘や孫も生れて来たのである。

僕は房子と結婚したから新しき村がこの地上に生れたという事実を素直に認め、この点だけでも房子と結婚した事をよかつたと今になつては言いたいのだ。そして安子があらわれて安子と僕が結婚したあとも、房子は日向の新しき村に夫と二人だけで居残つて今日まで新しき村の土地を守つて来た事には、僕は改めて感心しているのだ。それは夫になつた杉山正雄が珍しく立派な人間で、杉山は杉山を知っている人残らずから信頼され愛されている。又その資格を十分持つている男と一緒になつたから、出来た事ではあるが。

杉山は僕が房子と別れた事には少しも関係のない男であつた。僕が安子と結婚する事にきまつたあとで、僕の処に、「房子さんの事は御安心下さい。私が引受けて、不幸にはおさせしませんから」と言いに来た事があるが、その後波瀾がまるでなかったと言えば嘘に

なるかと思うが、それに打ちかち、今日まで立派に日向の新しき村の土地を守り通して僕への誓いを立派に守り通した男であり、近所の人にも実に信用されている事を聞き、僕は喜びもし、感心もしているのは事実だ。同時に房子も賞めていいと思つてゐる。

あの山中に二人切りで、何十年も生活した事は理由はともかく大変な事だった。最近埼玉県の新しき村がいくらか余力が出来たので、日向の新しき村にゐる杉山を訪ねる人もあり、よき交渉も出来るようになったが、それまでは二人の力だけでどうにかやつて来たのに僕は感心している。

僕自身は新しき村の事は若い人達に任せて、自分の個性を生かす仕事に専念出来るのを喜んでゐる。

三

人間は自分一人で生きていられるものではない。その内で自分と一番交渉のある人間は何と言つても妻である。僕は朝から晩まで、自分の仕事が出来、自分の仕事以外の事はまるで考えずに毎日を送る事が出来ているのを喜んでゐる。僕は子供の時、二十歳までは生きられないと自分では思つてゐた。そして何もしないで死ななければならぬ自分を考えると、何の為に自分は生れたのだと考えるわけにはゆかなかつた。しかしいくら考えても死ぬ時が来れば死なねばならないと思つた。だから死の怖くない人間になりたいと思つた。だが自分はなかなかそういう勇士にはなれなかつた。

二十五、六になつた時、自分は五十迄は生きられないと思つた。だがいつのまにかその五十も過ぎた。僕の妻の父は僕より一廻り上の西年^{さいねん}で、満八十になる年の正月元旦に死に、僕の兄はあと四月生

きると満八十になる時に死んだ。それで僕も満八十になる前に死にそうな気がした。実際七十七位から僕は時々病氣をするようになった。大病はしないのだが、仕事をしすぎて疲れると目まいがした。同じような病氣を何度かし、約束していた講演を何度かお断りしなければならなかつた。こんな事をくり返しているうちに自分もこの世からおさらばする事になるのだという氣もしたが、既に老人の部に入つた僕は、以前程死を鋭敏に恐怖する事は出来なくなつてゐる事実を認めないわけにゆかなかつた。

僕はこの事実に感謝しているが、しかしまだ死にたいとは思わない。生きられる限り生きて少しはものになりたいと思つてゐる。

僕は僕が満足出来る画もかきたいし、詩もかきたい、それ以上に愛する人々の幸福な姿が見たい、不幸にたくない。

この世はなかなか僕の思う通りにならない。僕の神経では追いつかない方に悪化しかねない風潮もあり、もう僕も生きてゐる魅力が段々この世から無くなりつつあるような氣がする時もある。だが僕はまだこの世に未練があり、まだこの世に残しておきたい仕事もあり、あとが氣になる事もある。

だがそれも若い時とはちがう。今の人間は不死にはつくられていない。死ぬ方が自然につくられてゐる。だが人間は一方これであるという事はない。未練はあるのである。そしてそれでいいのである。そして僕は今日まで生きられた事を感謝し、まだ当分は生きて御役にたたいという氣が残つてゐるのを感謝してゐる。

だが同時に人生には不幸が多すぎるのを、残念に思い、不幸になる人が一人もいなくなる事を望まないわけにはゆかない。

望んだからと言つて、それが何になる。何にもならないでも望まないわけにゆかない。それが人間、僕は本当の人間らしく生きてみ

たいと思っているのだ。

四

僕が新しい村をつくり、同志とこの仕事をしたのも、人間は自分に与えられた一つの生命を出来るだけ協力して全き姿で生かすのが本当だと思っているからだ。自分の個性を正直に生かす、それが最も人間らしい事と僕には思われる、他人の命令で他人の意志で自分の生命を生かすのではなく、自分に与えられた自分の意志で、自分を正しく生かすのが人間らしい事と僕は信じている。すべての人が自分の意志で、自分を正しく生かす事が出来る世界、それが人間の世界だと思っている。

僕はこの信念で新しい村を始めた。自他の自由意志を尊重する事を知らないものには、この僕達の望んでいる世界の事はわからない。夫婦でも僕は強制は嫌いなのだ。

僕はここで論文を書くとは思わない。これからゆるゆると本文に入りたいと思っている。

渚、ある男は新しい村に住み、新しい生活を始めて、今迄経験しないいろいろの生活をしたわけだ。

この本だけを読む人のために僕は少し新しい村の生活の話を書きたい。だが何しろ四十何年前の話だ、思いちがいが少なくないと思う。僕は雑誌「白樺」を出した時は、長年の友人と一緒に仕事をした。誰がどんな人間かという事はお互いによく知っていた。「白樺」を始めたからと言って人間の性質は変らない。皆一癖ある人物だったが、それだけに自分のいる処にいつもいて、僕の信用も裏切られた事もなかったし、皆僕を信用してくれた。そして僕がどんな人

間かを十分知っていた。

しかし新しい村の仕事を始めて、僕はお互いが知らなすぎた事を先ず感じた。

初めて新しい村に住んで働く人は、実際に働いた事のある人、先発隊と称していたが、先発隊として入村するには、先ず家を建てなければならぬ。会員の中に壁をぬった事があるという人の話を聞いて、僕はその人を先発隊に入れた。

その他にも労働した事のある人を何人か選んだ。その人がどんな人か僕は知らなかったが、先発隊にはそういう人がいいと思った。しかし実際にぶつかって、そういう人を選んだ事は失敗だった事に気がついた。先発隊に入れた人は、労働力とはともかく熱心に喜んで、かげ日向なく働いた。だが世間で働いた人の内には、随分人のいい人もいたが、怠けられれば怠けるという習慣がついていた。命令する人はいない。そしてよく働いても金にはならない、誰も小言は言わない世界では、悪気はなくとも一心に働く気にはつけないなかつた。僕達一家はまだ村の土地から一里半程はなれた処にいた。村の土地で働いている僕が信用している人が来ての話で、どうも働かない人がいて困る、農場の方から何か理由をつけて女達のいる処に帰って話しこんで、農場にはなかなか帰ってこない人がいる。

村の農場は三方川にかこまれ、一方は山で、十町以上も歩かないと他の村にゆけないような所にあった。

その話を聞いた晩、僕は村で皆が泊っている合宿場にゆき会を開き、皆で相談して朝川を渡ったら夕方まで川を渡って帰らない事にし、当番が昼食を運ぶ事にした。

そういう相談会をすれば働かないと風評のあった人も元々村に入つた人だけあって、決してただの怠け者ではなかった。会は思つた

より気持がよく、僕は安心した。

その晩、僕は皆と一緒に寝た。二列に頭を向いあいにして一室に六人か八人が寝た。僕の頭の向いには松本広吉の頭があった。

この松本広吉は村でチェホフの一幕物のイワンの役をやった。それが感じがあつて、人氣が出来、その後イワン、イワンと言われた。何年か後、僕が村から出たあと、新しき村の労働係として活動し、僕が信頼した会員の一人であるが、その晩、寝相がわるく夜中に手を頭の上につき出したらしく、僕は頭を相当強くなぐられた。もとよりなぐったイワンはその事に気がつかなかった。僕はイワンになぐられたと思うより、何かがイワンを通して僕の頭をなぐったのかも知れないというような氣も無いではなかった。

翌朝イワンにその事を言うといワンは恐縮した。皆面白がつて、「先生の頭を打った」とからかった。

これは四十八年前の話だが、僕は忘れずに覚えてゐる。

五

それから二、三日たつて、前に心配して僕に話した男、僕はその時分村の会計をやつてもらつた後藤真太郎だと思ふが、来たので様子を聞いたら、後藤は喜んで言つた。

「皆は真面目によく働いています、安心しました」

僕も安心した。その内に一軒の離れのような家を借りる事が出来た。二階家で、僕達は一階に住み、二階に木村莊太夫婦が住んだ。

木村莊太は僕についで年長者であり、文壇でもいくらか名を知られてゐる男で、僕についで、皆に信用されてゐた。労働にかけては僕とは比べものにならなかつた。人のいい男で皆に親しまれてい

た。

僕も皆と一緒に朝早く起きて、皆と一緒に川を渡り、皆と一緒に薪をかついで帰つて来た。

新しき村には一軒の家もなかった。畑はいくらが残つていたが、大部分は荒れたままになつてゐた。僕達は其処を一反(三百坪。何メートル四方になるか明治人間の僕にはわからない)四十円で買つたり五十円で買つたりした。ある個処だけは其処の一番の勢力家が持つていて、場所もよかつたが売つてくれなかつた。あとで六十円で買わされた。

この土地を買つた時は十一月十四日で、その日を記念して今でも村の祭日になっている。僕達はそういう冬に向つてゐる日から働き出したわけだ。新しき村の人は農閑期にあんなに働くのだから、農閑期にはどんなに働くのだらうと言われた事を今でも覚えてゐる。勿論これは感心して言つた言葉ではなく、多量の皮肉があつた事は僕も感じてゐた。

僕達は農業の事は殆ど知らなかつた。ただ働かないではいられない氣持を吐き出したかつた。

僕は川島伝吉といワンを仲間にして開墾をやつた。皆てんでんに自分のやりたい事をやつた。僕にとってはこの二人が一番氣楽な相手だつた。

松本広吉をイワンと呼んだのには、村に松本という名の人が二人あつたことも原因の一つかと思ふが、僕達は広吉の事はイワン、イワンで通してゐた。今でもこの名の方が、僕には親しみがある。

イワンは村に入るまでは宮崎市の写真屋に働いてゐた。僕が宮崎へ行った時に逢つたのか、イワンの方から僕を訪ねて来たのか、僕は忘れてゐるが、ともかく僕が宮崎県で新しき村をつくつたのが縁

で知りあった男だ。齡は十八、九だったろう。今神戸の方に住んでいて、今でも埼玉の村の人達にも親しまれている。いくつで村へ入ったか聞けばすぐわかるわけだが、僕はそれを一々調べる暇はない。僕は思い出すまま頭に浮ぶ言葉を書いてゐるに過ぎない。

イワンについて忘れることが出来ない一つの事がある。しかしその一つの事は今までに書く気になれなかった。今でも書くとき少し気がひけるのである。それは僕が新しき村の土地を最後にきめる前に、まだ見た事のない宮崎県の南の方を一度見てみようと思つて後藤眞太郎と二人で宮崎県の南部を旅行して、帰りに宮崎市によつた。その時、イワンのいる写真屋にイワンをたずねたのだ。取次にイワン自身が出て来た。そして店の前に僕が立っているのを見た時、イワンは思わず、僕の前に両手をついてお辞儀をした。僕はその時のイワンの態度に驚くと同時に、イワンがどのくらい僕が訪ねたのを喜んでくれたかがわかる気がした。僕はその時の旅行のいたる所で冷淡にあつかわれたあととただだけに、この事は僕に実に強い印象を与えた。

僕は旅行さきでは、初め歓迎された所も、警察か何処からか知らないが、注意があると見えて、翌日はうって變つたそつけないあつかいを受けるのが事実だった。

そのあとだけに真心を見せての僕への信頼感僕は僕の心を感動させた。

そしてその時イワンの言つた言葉が、村の祭日が十一月十四日、ロダンの誕生日にきまつた因縁になつたのだ。この事は他にも書いたが、他の本を読んでくれとも言えないから、ここに書かしてもらふ。

それはその時、イワンが明日僕達と一緒に村へゆくと言うのだ。

そしてその用意をしていたと言うのだ。

なぜと僕が聞くと、僕がその前イワンに逢つた時、僕が、「十一月十四日、ロダンの誕生日までに、村の土地を手に入れる事を話した」と言うのだ。

言つた僕は忘れていたが、聞いたイワンはそれを信じこんでいたのだ。

僕はそれ程までに僕がのん気に言つた事を信じ切っているイワンを、だます気になれなかった。僕はよし十四日に土地を手に入れよう、僕はイワンのこの言葉を聞いてそう決心し、事実決心通り十四日に僕は新しき村の土地を手に入れた。

間にたつた津江市作さんに僕はこう言つたのだ。

「十四日に御返事がなければ、縁のないものとしてこの土地は思い切つて、他へゆく」と。

僕の決心は変らないと津江さんは思つたらしく、相手を説得してその日にはつきり新しき村の土地はきまつたのだ。

イワンが僕の忘れていた言葉を信じ切つていたのが、僕の決意をきめたのだつた。

この時、間に入つて話をまとめて下さつた津江市作さんは今年百二歳で、長年農村のためにつくされた功勞で、今年勲章を戴いたのだ、宮崎県の児湯郡木城村（新しき村も木城村にある）から汽車でわざわざ上京し、そして又僕の処までわざわざ見えて僕を驚かした。事實は小説よりも奇なりと言うが、津江さんが満百歳以上になつて、わざわざ東京の僕の家にお迎え出来るとは思わなかつた。

つい思い出すままにいい気になつて書いた。

六

もう一人の川島伝吉の方も、変った径路で新しき村の先発隊の一人になった。川島だけが僕にとって新しき村の運動を始める前の知りあいであつた。

川島は福島県の山村の農家の息子だったが、農業に興味が持てず、文学の仕事がしたので、僕が我孫子にいた時、歟一丁持つてやつて来たのである。

彼は農家出であつたが、農業の知識はまるで持っていないかつた。

僕が新しき村を始める時も、初めは参加を躊躇していた。そして長与善郎の処に暫く働きに行つてゐた。しかしいよいよ新しき村の仕事をする時、川島は僕と一緒に新しき村に参加する決心をした。

そういう川島だから村の農事に就いては知識的にはあまり役に立たなかつたが、不思議に身体は子供から農家の家に育つただけであつて、村で一番疲れを知らない労働者だつた。

殊に長距離に重いものを背負つて歩く事にかけては川島は図抜けていた。一里半の山道を一俵の俵をかついで殆ど休まずに、平気で僕と談笑しながら歩いたのには僕は驚いた。僕はその時その三分の一と言いたい、五分の一位かついで歩いた。

短距離では横井国三郎という、相撲をとらずと村一番の男がいた。横井だけがその時川島と同じく一俵の米をかついだが、途中で何度休んだか、三倍以上の時間がかつたと記憶している。

そういうわけで僕は川島、イワンと一緒に働くのが一番気楽で、神経をつかわずにすんだ。しかし開墾の仕事は僕には楽ではなかつた。僕はよく背のびをした。二人とはとても比較にならなかつたが、

相当忍耐がいった。しかしそれを苦にするよりも、内心満足してゐたと言う方が本当だと思ふ。毎日僕は一定の場所を三人で、時に四人の事もあつたかと思ふが開墾し、昼飯の鐘を待ち兼ねた。

昼の休みには元氣な疲れを知らない若者達は相撲をとつたりした。僕は見物役で、よく笑つた。

その時の村の食事は随分ひどいものだつた。麦が四割入り、おかずは味噌だけだつた。麦飯はあまり好かない僕だったが、皆がそれで不平を言わないのに、僕が不平を言うわけにはゆかない。村では何も收穫はない。会計の後藤がきめたのか、炊事係の人がきめたのか、僕はその方には何の知識もないので、万事人任せで、出されるものを不平言わずに食う事にしてゐた。

村に入つて半年位たつと、生活の変化か、水のせいとか、病氣する人がよくあつたのは、今思えば食事のせいかも知れない。僕は子供の時から万事他人まかせの生活をして来た。新しき村でも僕は衣食住についての自分の意見は出さなかつた。

僕が用心したのは、新しき村が僕の村にならない事だつた。僕も村の一員に過ぎない。僕に嫌われては村に住めないでは、新しき村ではない。村は皆が自分の意志で働くのでなければ新しき村ではない、旧い村である。

だから僕は全部村の事は村の人に任せて、自分はそれに自分の意見は言つても、それは村全体の立場で言うようにし、其処に私情は入れたくなかつた。同時に皆が自由の考えを言える村でなければならなかつた。同時にそれは現実を無視せず、何処までも現実を重視しなければならぬ事実を認めた。

新しき村の食事は、近所の農村の人の食事にくらべて一層悪かつた。この事は皆認め、それを口にするものもあつたが、それに不平

を言った人は一人もなかった。あったかも知れないが僕の耳には聞えて来なかった。

何しろ村は金がなかった。村の収入は何もなく、農作物も始めた許りで何も出来なかった。

そして皆元氣だった。

新しき村の未来に就いて悲観しているものはなかった。労働にない都会人にとってたしかに農業の仕事は苦しかったにちがいないが、苦しさに耐える事に一層の勇氣がわいた。それ程皆元氣だった。

世間では新しき村を問題にし、若い賛成者が多く出れば、一方悪口も相当言われた。しかし僕はその悪口がいかにか世間からほめられていた人から出ても、見当がいとしか思われなかったので、自信を増しても、不安は少しも感じなかった。多くの批評は新しき村の問題を経済問題としてあつかい、オーエンの亜流として批評し、空想社会主義ときめてかかっていた。僕達は内心の要求でこの仕事を始めたのだ。腹がへったものは先ず食わねばならない。僕は利己心と利他心の内心での矛盾した生活に不満を感じ、心の落ちつきが得られず、そういう生き方はどうしても本当と思えず、自分の為に働く事が同時に他人の為に働く事になる世界を求めたのだ。

新しき村で働く事は自分の為であり、隣人の為であり全部の人の為でもある。他人の利益を奪わなければ自分は金持になれない、そういう世界に僕達は安住出来なかった。

同時に自分の言いたい事が言えない事も閉口であり、自分のしたい事が出来ない事も困る。現実には甘くはないが、我等同志は、人類に於ける兄弟姉妹である。今の時代、今日まで人類が進んで来て、皆が協力して働けば、誰も犠牲にする事なしに生活が出来るべきだ。

この事はわかり切っている事で、議論も出来ない以前の問題だ、どうしても出来るようにするのが、人間の務めでなければならぬ、それが出来ないのは自分達の努力が足りないからだ、本当の人が出て来ないからだ。

今に何処からか本当の人間達があらわれてくる、それ迄僕達ががんばる必要があるだけだ、出来ないですまされる問題ではない。

僕達はそう思つて、人々から悪口を言われればなお自分達の使命を感じた。誰でも出来る事なら、何も好んで自分達がやり出す必要はない。誰も出来ないと思つているから、自分達がやり出したのだ。

悪口言われればなおさらそう思うのだった。他人が見ればドン・キホーテに見えたであろう。だが僕達の内心は出来ないではおさまらないものがあつた。そして出来て見たら、利己心の集りであつてはならない。皆が正直に生きられる村、僕達はその大事な事を忘れずに努力をつづければ何処からか力が加わるはずだと思つた。人間の本心を僕は信じているのだ。かくて僕達は誰が何と言つても元氣だった。自分の本心をだますわけにはゆかなかつた。

だから新しき村に入る人は先ず第一にその人が本心から村に入りたく思っている人でなければならなかつた。世間では生活が出来ないから一時的に村で餓えからまぬがれようと思う人はお断りした。

新しき村を、慈善事業とか教化団体のように思つたり、共產主義のように思つたりする人は皆失望した。人類全体が調和して生きるように人間の本心はつくられてゐる。その本心に従順なものだけを僕達は歓迎したのだ。現実とはよりなかなか思うようにはならない。思うようにならない世界で、こつこつ働くことに喜びと希望の持てる人、そういう人の力で新しき村は少しずつ成長をつづけ、いつも若々しい心を持った人の参加を得て来た。本心をいつわる事は

新しき村にとって一番の邪道だ、だから村に住みたくなかった人は、いつでも出られる事になっていた。勿論、村に未練を持ちながら、何かの事情で村から出た人には、村の人も未練を持っている。一番大事な事は失いたくない。

七

村の労働はたしかに苦しかった。そして思想的には文明の利器を極度につかうわけであるが、現実的には金はなし、農業の知識はなし、随分周囲の人から見たら滑稽な事も多かったにちがいない。今の人類の進歩なら二、三時間本気に働けば、あとは遊んでいても生活出来るはずと、僕の理想では考えられたが、現実はその甘いものではなかった。東京で農業の本を見、いくらか進歩した機械のつもりで僕が買った耕作機を村の馬につけたら、溫和^{なだ}しい点では無類の馬には無理で、三人の人がその馬を助けても馬は銅像のように動かなかった。土地でつかう機械をつかって土地の人に教わった通りにやったら、馬は一人の人で自由に動きだして、僕達を啞然とさせた事がある。名譽な話ではないが、現実はなかなか理想通りにはゆかぬ。その代り、時には空想しないよき人もあらわれ、思わぬ処から予期せぬ助力もあるものだ。だが広くもない土地に、三、四十人の人がいて自活しようというのとはとも無理である。無理である事は僕にもわかつていたが、宮崎の山の中にわざわざ村に入りたいと言ってくる熱心な若者がいれば、つい入れたくなるのも人情である。

初め僕は入村係の一人になっていたが、入村係として僕は自分の不適當な事を知って、自分で抜ける事にした。僕が入村係をしてい

ると、つい入れたくなるのだ。そしてあとで面白くない人は、僕にとり入る事がうまい人の場合が少なくなかった。話はききつ走りをしたがる。もう少し時間をおって、村の出来たての話を戻そう。

八

開墾の仕事は何日づづいたか。ともかく毎日皆と一緒に朝早く農場に通い、開墾の仕事をした。少し働いては背のびして腰疲れを癒した事を覚えていた。満三十三歳と六カ月、それまで歩く事はわりに修行を積んでいたが、その他の労働はした事はなかった。僕は半蔵門のそばの家から大学に通っていた時、一度も電車にはのらず、時には午前一度自分の家に帰って、又午後大学へ歩いて通った事もあった。村でも、児湯郡木城村石河内字城の村から高鍋町に買物に荷車をひいて出かけた事がたまあったが、もとより僕一人ではいっただけではない。片道五里以上あった。それを兄弟（と言っていた）一人か二人で行った事がある。向うで買物をして、それを車につんで持って帰るのだが、僕は大概あと押しをしたと思うが、十里以上歩いたわけだが、畑で働くより楽だった事を覚えていた。荷車をひいてゆく時は勿論、一人で買物にゆく時も、僕は乗合馬車を利用した事はなかった。東京から来た若い者にこの乗合馬車を利用する者があり、僕とゆきちがうと、あわてて馬車から降りて挨拶された事があり、一寸変な感じを持った事があるのを覚えていた。

僕は乗合馬車にのるなぞとはその時分考えてもいなかった。

しかし新しき村の労働で僕が一番苦しく思ったのは材木運びであった。村に合宿所をつくるのが一番の急務で、一軒の相当大きな家

を売ってもいいと言う人があり、それを買って村の土地に僕達で運んだ。僕達と言っても、実際は僕はみそつかすの方だった、手つだわらないではいられなかった。

大きな材木を大勢とかついで運んだ時は、いくら要領よくやれたので、その時の事はよく覚えていないが、新しく建てまします必要があったのと、屋根は力や葺きだったせい、屋根をソギぶきにする事になり、その為に材木やソギを一里五町ある製材所からはこばなければならなかった。皆が担いで運ぶのだった。元氣な連中は他人より重いものを運ぶことを自慢にしていた。

會計をやっていた、大阪で会社に勤めていた後藤真太郎は、重いものを担ぐ点では負けるので、足の早いのを利用して一回他の人より多く、一里五町の山道を材木をかついで往復した。あとの人は午前一回、午後二回往復したわけだ。だから六里以上の山道を重い荷をかついで通ったわけだ。後藤は十里以上も歩いたわけだ。多く働いたからと言って、一文も小遣いをもらえないわけではなかった。誰も雇われてはいないのだ。誰も主人はいないのだ。だがそれだけ皆自分が人並以上に働く事を誇りにしていた。

そういう点で一番惨めなのは僕である。他の人の半分と言いたい、が、三分の一をかついで、他の人より参った。皆は二十前後であり、僕は三十を越していた。だが誰も面と向つては僕の労働力のない事を笑う人はなかった。そして僕が弱っているのを見ると、皆助けにくれた。しかし僕自身は、自分の力のない事を残念に思った。自分は先にたつて働く力はなさすぎた。自分が働けないのに、他人に働けとは言えない。言いわけはあるが、しかし僕は自分が先にたつて働けないのは新しい村の為によくないと思ったが、しかし体力のない事は仕方がない。

実際一里五町、誰がはかったのか知らないが、これは信用おける距離だと僕達は信じていた。そしてそれは一人の人がやつと歩けるような細い山道で、車の通りような急な処が多かった。村に近づく所に一つの難所があった。急な登り坂が一町以上続いていたのだ。小丸川に沿った道で景色はなかなかよかったが、澄み切った水の川が木立の間に見えがくれし、向い側にはなだらかな山の起伏が見え、散歩道としては極上の道だが、疲れ切り肩がめりこんだ感じを受けて一里近く歩いた処で、この難所につかるのだ。大げさに言えば、崖にころげおちたらさぞ案だろうという気がした。足がなかなか持ち上らないのを一歩一歩持ち上げなければならぬ感じは實際苦しいもので、その後、夢のなかでこの苦しみを何度か味わわされた事は事実だった。材木をかつぐのも苦しかったが、ソギを運ぶのはなお苦しかった事を覚えてゐる。ソギは知らない人があるかと思うが、一つ一つは小さい軽いものだ。だからつい馬鹿にしてこの位は大丈夫だと思つて、袋(?)に入れて担ぐのだが、初めは軽いついていたのが段々重くなる。捨てるわけにもゆかずに難所にたどりつくともういけな、足がなかなか持ち上らないのだ。僕は自分がそういう経験をしたので、戦争中の闇屋に同情しないわけにゆかなかつた。彼等は僕が背負つて苦しんだ何倍かのものを背負つて歩いているのだ。僕はそれを見ると、僕に出来ない事を平気で(ないかも知れないが)かついでいると感嘆した。

村の若い人達は重いものをかつぐ事を自慢にしていた。だが恐らく、その点では川島にかなう者はなかつたろう。少なくとも川島は力まずに、一番重いものをかついだらう。

その点で川島の身体は農民に出来上つてゐた。彼ははじめ農業に興味を持っていなかつたが、畑で働くと思つて頭がよくなると言つ

ていた。

村にはいろいろの人が居た。今それ等の人の事を公平にかくわけにはゆかない。一人一人実に愛すべき人、熱心な人、正直な人がいた。そうでない人もいなかったとは言えないが、新しき村へ入った人に世間的な人は少なかった。そして皆少しづつ変っていた。変人の処がいくらかある人の方が、新しき村では当りまえの人として通用したと言える。

如才ない人は村では辛抱が出来なかった。そういう人の方が村では変人に見えた。

今考えると、村のやり方には近所の人が見て不思議に思う事が多いのは無理がなかった。しかし若かった僕は理想に燃えていた。自分達の生活こそ本当の生活だと思っていた。

少しあとの話だが、僕の所に宮崎市の近くの農村の青年団の団長が二、三の団員をつれて来た事がある。そして僕に聞いた。

「新しき村では村に無断で入ってくる人を鉄砲で撃つというのは本当の事ですか」

聞かれた僕の方が驚いた。そんな事はないと説明すると、団長は我が意を得たという顔をして団員に言った。

「それ御覧、矢張り来て見なければわからない」

その時分、宮崎市で鳥をうつために猟銃を一つ買った村の人があった。それがそんな風評を生んだのであろう。

又団長は僕に聞いた。

「新しき村では仙台平の袴をはいて荷車をひくというのは本当ですか」

これにも僕の方が驚いた。村の人は凡そ身なりはかまわず、何処へも出かけた。袴なんか持っている人は少ない。しかし僕は考えた。

入村する人を迎えにいった時、その人は袴をはいていた。そして袴をはいたまま、村の人が持っていた荷車を一緒に曳いたり押したりして、荷物を運んだにちがいない。

僕がその事を言うと、団長はまた我が意を得たりという顔をして、「それ見ろ、矢張り来て話を聞いてよかった」

万事がそんな調子だった。

僕は川でかこまれた昔城のあった所に大勢で住んでいた。そして金をもうけるような仕事は何もしなかった。それで近所の人はいろいろの想像をめぐらした。

その想像は、僕達にはとても想像出来ないものだった。

或る人は村の人は狸の皮でも取っているのだらうと言っているという話を聞いた。

もつとひどいものになると、村では贋造紙幣をつくらっているのだらうという噂も聞いた。

こうなると反って滑稽で腹も立たなかった。

ともかく僕は毎日働いていた。だが金のとれる仕事はしなかったし、食うものはまだとれなかった。勢い金に困って、関西の支部に金を送ってもらう事をたのまなければならなかった。

東京には二、三百人の会員がいたが、金の余裕のある人はいなかった。関西の支部をしている人、大阪、神戸、京都の支部をしている人はいくらか金の融通のつく人々だった。それ等の人を頼るより仕方がなかった。

友人も心配してくれた。僕は友人に迷惑をきせてまで贅沢をする気になれなかった。出来るだけ金のかからない生活をした。誰もそれに不平を言う人はなかった。かくてともかく半年はたち、冬もすぎ春になった。宮崎の春は早かった。

九

三月上旬には山桜も咲き出した。村の合宿の家も出来かけて来た。と言つて僕の記憶はあてにならない。あてになるのは、合宿所をつくる為に毎日材木を運ぶのに苦労している最中、僕は「白樺」の十年の祝いを兼ねて、半年ぶりに上京する事になった事だ。そしてこの上京の帰りに何人かの兄弟が僕と一緒に入村する事になった事だ。

僕はこの旅行の時、汽車の窓から手頃の材木を見ると、一寸担いでみたい気になった、不思議な事実を未だに覚えてゐる。

しかし自分はこの村を出て、妻駅につく迄の或る事実を書かないわけにはゆかない。書きたくない事実ではあるが。

その時分はまだ日豊線が出来ていず、汽車で東京に出るのは妻駅から熊本の方を廻るより仕方がなかった。妻駅にゆく道は天孫降臨と言われた土地の近くを通るだけあって、近場古墳が多く、今はどうか知らないが、四十七、八年前はなかなか感じのいい道だった。川を二つ越したように思う。その一つの川は川向うに針金伝いで渡された舟を子供が紐をひいてあやつた。その子供の小さいのが可愛らしく、僕達の仲間では誰言うともなく猿の渡しと愛称していた。日向は矢張り古代の国だなどという感じを与えた。高鍋へゆくより遠かったから四里はあつたらう。

僕が東京へ初めてゆくので、村の男の人は全部送ってくれた。

だが途中で、Hが少し風邪気で、ここで失礼すると言つて、一人で村へ帰ることになった。

その事をHから僕がじかに聞いた瞬間、

「僕も一緒に帰るよ」

と言いたい気がした。しかし僕は勿論そんな事は言わなかった。そして僕はそのままあの皆と妻駅に向つた。

しかし僕は矢張り本当だったのだなと一人で思った。それは誰にも言えない事だった。

Hがそう言つて帰つたのは、妻からそう言つて途中から一人で帰るように言われていたからだ、僕は直感したのだ。

なぜ僕はそう思つたかと言うと、その少し前から、僕は二人の間を感じていたのだ。勿論その事は誰にも言わなかったが、気がつかないわけにはゆかなかった。

房子が僕を夫として尊敬してしてくれる事は僕には疑いない事実だった。だが浮気の虫では僕に負けない女だった。僕の妻になるまでも、その方では信用されなかった。仲人になつてもらつた房子の父の親友もその方の責任は持たないという条件で僕は承知した。

僕はそれを承知で房子をもらつた。房子の父は地方の有名な政治家で、代議士にもなつた事があり、その後も勢力者らしく、僕も逢つて悪い感じは受けなかった。僕が房子をもらう事を喜んでくれた。しかし房子は、このお父さんが母に内証で他の女の所に泊りこんで帰らないのを、母に同情して父を迎えに行つて連れて帰る事を自分で言い出して実行したような娘時代を持ち、また母の姉が料理屋をやつており、その伯母を一番尊敬していた。

子供の時からそういう空気にまかつていた房子が、一方僕を尊敬していたにしろ、僕だけで満足出来なかつたのも無理はないと、小説家の僕には察する事が出来るのだ。

まだ東京にいる時、我孫子にもゆかない時分、僕は原稿を書くのに疲れて、房子の要求を満たせなかつたある時、「あなたは妻を持